

「くっさ！」

久々に自宅に帰ってきてきての第一声が、これだと思おうと悲しくなる。

「おかえりー」

だらけた格好の同居人が声をかけてきた。ジャージ姿で仰向けに床に転がっていて、綺麗な黒のロングヘアは床に散らばっている。

「どうして三日でこうなるの……！」

出張に行く前と比べると、変わり果てた我が家。まるでごみ屋敷だ。靴を脱いで、物を踏まないように気を付けながら彼女に近づく。

「不思議だよね」

そう言いながら上体を起こして座る柚香。

「どう考えても原因は袖香でしょ」

二人暮らしのワンルーム。玄関入ってすぐにキッチンとお風呂。その先に十二畳の洋室に、大きめのベッドとローテーブルとソファ。家具も物も少なめだ。散らかる原因は一つしかない。

「……人間が生きている以上、ゴミというものは出るのだよ。紗那ちゃん」

「苛立つ言い方ね」

「生きているだけで、イライラされるなんて辛い！」

わあっと両手で顔を覆って、泣くふりをする袖香。

「生きていきたいのなら、せめて片付けくらいしてよ。ここは私の家で袖香は転がり込んできたんだから」

クローゼットの前で、着替えながらそう言い放つ。

「え？ なに？ 私っついていま、命の危機なの？」

「このまま私の家において散らかしたままだと、いずれそうなるかもね」

「まじでか！ ヤダー！」

ジタバタと体を捻って駄々をこねる袖香。

「嫌なら片付けなよ」

「その議題につきましては、脳内会議に掛けてから返答いたしますので」

「片付けなっつて」

「気が向いたら」

「いつまでたっても、気なんか向かないでしょ」

いつものやり取りをしてから、私はゴミ袋を持って部屋を片付け始める。

「おっ！ さすが紗那！ 私のために部屋を片付けてくれるなんて、偉いな！」

「うるさい！ 柚香もやるの！」

座ってる柚香に軽く蹴りを入れて、袋を近くに置く。

「痛っ！ 酷い！ DVだ！」

蹴られた場所を抑えて、大げさに抗議してくる柚香。

「家族でも恋人でもないのに、なにがDVだか」

「実は血のつながった姉妹だよ」

「わー！ そうだったんだー。知らなかったー。絶縁します。さよなら」

「復縁して！」

「復縁してほしかったら片づけてよ」

「しようがないなあ」

そう言って、柚香は床のゴミを拾いだす。一つ、二つ、三つ。調子良く片付けていたと思ったら、動きが止まった。

「ちよっと？」

「休憩してないよ！」

「完全にしてたでしょ！」

「してない、してない！ 拾うよ！」

またゴミを拾い出すが、少ししたら動きが止まった。ちよっと動いただけなのに、屍のようになっている。

「……柚香さん」

「やってるよ！ 嘘だけど！」

「見れば分かるわ！ 嘘つきは泥棒の始まりだよ！」

「もう手遅れだよ！ すでに泥棒だから！」

「はあ！？ 何盗んだの」

「皆のハート！」

自信満々のドヤ顔を向けられた。

「わあ、気持ちの悪い……」

「言葉の暴力反対！ もっと優しくして！」

「これ以上優しくするなら、お金の相談をしなきゃね」

「世の中金か」

「そうだよ。世の中金と顔だよ」

「私は両方持っているわけですが、世界征服はできるでしょうか」

「ちよっと無理かな」

「何が足りない？」

「人として大事な物」

「例えば？」

「常識とか」

「常識ある人間が世界征服したがる訳ないじゃん！」

あははと笑いながら言い返してくる柚香は、完全に掃除を諦めていた。

「掃除する気ないなら、あっち行っててよ」

「いつも悪いね」

「そう思ってるなら、散らかさないでよ」

大人しくソファに移動する柚香。テーブルの上にあったノートパソコンを手にとると、何かを打ち始めた。

「仕事？」

「まあ、そんな感じ」

「へえー」

パソコンを覗こうと近づくと、素早く閉じられる。

「紗那ったら、そんなに私のこと気になる？」

「あんたのことはどうでもいいけど、なんの仕事してるかは気になる」

「秘密結社の社長だつて言ってるんでしょーが」

「信じる訳ないでしょうが」

「ほとんど家に居てもできる仕事で、お金もそこそこ入ってくるって、それしか無くない？」

「それ信じてとか、私だけ馬鹿なのよ」

「そこは親友として信じてくれないと！」

「……まあ、家賃半分出してくれてるからいいけどね」

「なんなら全部出してもいいよ」

「じゃあ、そうしてもらおうかな」

そう言っただけで片付けに戻る。本当に行く所がないのなら、お金なんて払ってくれなくてもいいのに。

「片付け終わったら、ご飯宜しく！」

「調子に乗ってたら、放り出すよ？」

「そんなこと言っちゃって！ 何も聞かずに同居してくれるくせに〜」

「あの時入れなきゃよかったわ」

数ヶ月前のある日。突然転がり込んできたのは、学生時代からの友人だった。中学からの付き合いで、一番長く傍に居る友人。当たり前前みたいにずっと一緒にいたものだから、今更親友なんて括りにするのは違う気がする。なによりこれとセットに見られるのは嫌だった。

そんな彼女が私の家の前で待っていた。約束していただろうかと、慌てて記憶を辿るがそうではない。『どうしたの』と聞けば『一緒に住もうかと思ってさ』と帰ってきた。急に

何を言ってるのかと思ったが、きっと事情があるのだと思い深くは聞かなかった。そもそも聞こうとすると、はぐらかされてしまう。

そんなこんなで、同居することはや数ヶ月。彼女が家に居るのも当たり前になっていた。なんでもうちに来たのか、理由も分からないまま。

\*\*\*

嫌なことは毎日のように降りかかる。積もり積もって、溢れ出したのが今日だった。

「……ただいま」

いつもとは違う。独り言のような帰宅の合図。珍しく返事は無かった。いないのかと一瞬思ったが、風呂場から響く水音を聞いて安心した。

電気も付けずにふらふらとベッドまで歩いて、俯せに倒れ込む。

「疲れた……」

何もかも、上手くいかない日だった。今の自分には仕事しかないのに、思い通りにできなかった。どれだけ頑張っても、自分の力ではどうにもならないことがあって、しようがないと思っても感情は無くせない。

「あ……このまま溶けて消えてしまいたい」  
嫌なことも全部自分の中に閉じ込めたまま。夜の間に誰にも知られないうちに、ゆっくりゆっくりと。

「……そこで溶けられたら困るんだけど」

「……なんでよ」

聞き返して顔だけ柚香に向ける。

「シート替えるの面倒じゃん」

そう言いながら近づいてきて、ソファに座る。長い髪を鬱陶しそうにタオルでわしゃわしゃと拭く姿は、犬のようだ。

「片付けしないんだから、それくらい替えてよ」

「気が向いたらね」

「向かないくせに」

「よくお分かりで」

冗談めかして言う柚香。いつもどおりの柚香。いつもと違う私。

「片付けもしない。料理も作らない。ほとんど家に居るのに。たまには何かしたら？」

いつもならイライラしないし、こんな事も言わない。疲れてるんだ。棘のある言い方だ。って分かっている、止まらなかった。

「そもそもなんでもうちにいるの。別にお金に困ってる訳でもないし、他にも友達いるんだから、そっちに行けばいいでしょ」

言わなくていいことばかりが、最悪の形で出て行く。言いきって、すぐに後悔した。

「……そうだね」

柚香の返事を聞いて、鼻の奥がツンとなってベッドに顔を押し付けた。自業自得だ。なにを泣こうとしているのか。

沈黙の後、柚香が口を開いた。

「なんでうちにいるのって聞いたじゃん」

私は黙って続きを待つ。

「あんたがさ」

柚香は言いかけて、少し言葉を止める。私がなんだと言うのか。

「……泣くから。明らかに様子がおかしい日でも、なんでも無いって言って一人きりで泣くから」

私の脳内にあつた答えと、あまりにも違いすぎて思考が停止する。

「長年付き合ってきた彼氏に振られた時も、仕事で大失敗した時も、他の友達と大喧嘩した時も、なんでも無いって言って一人になろうとするから。そのまま消えてしまいたいそうなの、あんたの傍に居れないのが嫌だったんだ。大事な時だけ切り離されて、結局他人なんだなって思い知らされるのが辛かった」

ぺたぺたと、ゆっくりこちらに近づいてくる足音。

「まあ、他人は他人なんだけどね。でもさ、せめて消える時は看取ってやろうと思って」

見上げるとベッド脇に立った柚香が笑った。作った笑顔。普段は気を使わないガサツな女のくせに。ずるい。

「だから消えるなら、さっさと消えちゃえよ。私があんたに殺されちゃう前にさ」

「うわっ！ なにすんの！」

そう言って柚香は、私の上に落ちてきた。十字に重なる様にして私を抑え込む。

「消えないかなって思ってた」

「消えるわけないでしょ！」

「そっか、そりゃよかった」

そのやり取りの後、ため息を一つ吐く。

「なんだよ！ なんで落ちこんでんのよ！ 仕事か！ 仕事の悩みなら私に任せろ！」

「痛いってば！ 秘密結社の社長になんか、仕事の悩み相談できないわ！」

「社長馬鹿にすんなよ！」

「社長じゃなくて！ 馬鹿にしてるのは秘密結社の方よ！ 気づいて！」

「知ってる！」

秘密結社の社長様が、どうしてうちに居座っているのか分かった記念すべき日。このままいつもと同じように、二人でくだらない話をして笑って、私にご飯を作って片付けをするのだろう。

どうせ出て行きなどしないのだから、今日も晩御飯を作ってあげることでしょう。